

丸山 眞男 著「日本の思想」(岩波新書)を読む

2026年1月30日

担当: 山本 雄一(S38 経)

2026年1月30日の読書会は、丸山眞男著「日本の思想」(岩波新書)を読みました。この本は1961年の初版以来、2024年5月までに113版を重ねているロングベストセラーです。丸山眞男は、福澤諭吉の研究者としても知られており、この本でも随所に福澤の記述が引用されています。「福澤は、幕末から明治、丸山は戦前から敗戦を経た戦後という、いずれも日本社会がひっくり返るような激動の時代に、思想形成を遂げ、その経験を踏まえて、その後の時代に知的なリーダーシップを発揮していった思想家です。……丸山は非常に多くのものを福澤から学んで、自分の肥やしにしています。」と平石直昭東京大学名誉教授は述べています。

本は、論文調のⅠ.日本の思想、Ⅱ.近代日本の思想と文学と、講演体のⅢ.思想のあり方について、Ⅳ.「である」と「する」ことの四部からなっていますが、著者もあとがきで述べているように、Ⅰ章がこの本の骨子です。

Ⅰ章では、著者があとがきで述べているように、

1. 日本にいろいろな個別的な思想—伝統思想(儒教、仏教、神道、国学等)の座標軸の役割を果たすような思想的伝統が形成されなかったという問題
2. 凡そ千年をへだてる昔から現代にいたるまで(明治以後に流入したヨーロッパ思想を含む)世界の重要な思想的産物は、ほとんど日本思想史のなかにストックしてあるという事実

以上にもかかわらず、「伝統」思想と「外来」思想は、雑然と同居し、弁証法的止揚を果たしてこなかった。それは、日本においては、西欧におけるキリスト教のような機軸がなく、新しいものを取り入れるすばやさはあるものの、かといって古いものを捨てきれないというあいまいさがある。

日本の近代化は、福澤諭吉が明治政府を「多情な老婆」と表したように、官僚制度や経営体等機能集団では近代化がみられるものの(機能の合理化)、部落共同体・家族主義という前近代性を温存利用(家父長的人間関係)という形態をもって、「リーダーシップが一元化しないで、しかも多事にやたらに世話をやく」という傾向として現れた。これが、日本における社会科学の思考形態(理論信仰)と文学における実感信仰の相交わらぬ平行線も同じルーツという。

ここに異質なものと登場したのが明治時代からのキリスト教であり、大正末期からのマルクス主義であった。キリスト教はヨーロッパ文化千年に及び「機軸」であり、マルクス主義もその前提として、キリスト教の良心、近世合理主義の論理、近代科学の実験操作という現代西欧思想の伝統をもっているが、その理論的なもの、概念的なもの、抽象的なものが日本的感性からうける抵抗と反発を招いた。

おわりにで丸山は、「私達の伝統的宗教がいずれも新たな時代に流入したイデオロギーに思想的に対決し、その対決を通じて伝統を自覚的に再生させるような役割を果たせず、そのために新思想は次々と無秩序に埋積され、近代日本人の精神的雑居性がいよいよ甚だしくなった。日本の近代天皇制はまさに権力の核心を同時に精神的「機軸」としてこの事態を対処しようとしたが、国体が雑居性の「伝統」自体を自らの実体としたために、それは私達の思想を実質的に整除する原理としてではなく、むしろ否定的な同質化(異端の排除)作用の面でだけ強力に働き、人格的主体……の確立にとって決定的な桎梏となる運命をはじめから内包していた」

丸山は「タコ壺文化」と「ササラ文化」という比喻をもって西欧のように基底に共通した伝統的カルチャーのある社会(ササラ文化)と違い、日本は最初から専門的に分化した集団(知識集団・イデオロギー集団等)がそれぞれ閉鎖的な「タコ壺」をなし、仲間言葉をしゃべって「共通の広場」が形成されない社会であるという。この点は、Ⅲ章で更にふれられている。

Ⅱ章「近代日本の思想と文学」では、政治－科学－文学の三角関係が述べられていて、マルクス主義が政治と文学の関係に転機をもたらした。政治的な運動、革命思想をもたらした。プロレタリア文学が論理的な構造をもった思想として表われ、小林秀雄が従来の文学は思想性が欠如していたと指摘した。マルクス主義は概念を愛し、合理性、実証性、弁証法的に止揚した唯物論、実践的倫理に立脚していたが、現実を愛することが欠如していたため、現実個別的状况で動かねばならぬ政治と理想のギャップにぶつかり、更にスターリンによるトハチェフスキーソ連国防次官兼参謀総長をはじめとする3万人に及ぶ将校の粛清があり、マルクス主義に基づく運動としての政治が潮を引き、文学では転向者が増えた。

1) 政治＋文学 vs 科学、2) 政治 vs 文学＋科学、3) 政治＋文学 vs 科学の三つのとらえ方がある。1)では政治と科学(マルクス主義)が文学を抑圧してきたこと、2)では知性の自由と普遍性を擁護する道、3)では文学＝思想 政治＝現実との矛盾ない共存についての議論となっている。

丸山はしめくりに三つの引用によって彼の考えを示しているように思える。一つは、三木清の指摘する「知性は空想によって助けられねばならず、空想も知性によって助けられることが必要。知性と空想とを全く相反するもの、相容れぬもののように考えることは間違っている」。また、おわりにで引用している H.G.ウエルズの「知性の個性的相違で抹殺するのではなく、むしろそれを確認しながら、相異を組み合わせていくことで、包括的世界概念を樹立しよう」。最後の引用は、J.N. Shklar の「人間を歴史的運命の道具とみなさず、社会の自由な創造者とみること」、すなわち、「人間が自分自身をも、また自分の社会をも、希望のままに処理する力があるという概念」。

Ⅲ章では、「思想のあり方」についての講演で、イメージが独り歩きして、現実と離れて独自の存在となり、本物よりリアリティを持っているイリュージョンが新たな現実を作り、逆に真理がおいてきぼりになる。ここでも、Ⅰ章でも述べたササラ型とタコ壺型にふれ、西欧では、19世紀前半は、包括的、総合的学問体系であったが、19世紀後半には個別科学が発達し、分化、専門化、独立化が始まった。日本がヨーロッパの学問を受け入れた時期がこの時期となったため、初めから分化、専門化したものの、別々の受け入れとなった(タコツボ化の要因)。ヨーロッパでは、個別科学の根は共通だったが、日本では和魂洋才で、東洋の道徳と西洋の技術の二分法となった。

タコツボ化の下では、文学畑と社会科学畑の間にはコミュニケーションがなく、内と外とみなされ、またうちの中でも細分化され、共通の言葉に乏しい。マスコミは、タコツボ間をつなぐも、タコツボの中にまで浸透せず、相互間の閉鎖性を打破していない。

Ⅳ章の「である」と「する」ことでは、その違いについて、「である」は静止した属性が持続する状態。儒教の教え。「する」は、運動や過程が重視されている。経済の領域では、「である」属性は例えば、資本の所有者(株主である)等に現われ、「する」は機能としての経営者(経営をする)に現われる。政治の世界では、「である」価値の執拗な居座りがみられ、「する」価値の滲透が遅れがちである。「である」社会は部族社会で、タブーによって秩序を維持し、建前の論理が横行する。

福澤諭吉は、維新の頃、「である」価値から「する」価値への歴史的変革の意味を幼児のために書いた(「日々のおしへ」)。近代日本の躍進は、「する」価値への転換によるもので、「する」価値が浸透しながら、「である」価値も根をはり、その上、「する」価値を建て前とする組織がしばしば「である」社会のモラルによって、セメント化されてきたところの混乱がみられる。

但し、注意すべき点は、政治や経済の面では、果実・成果によって判定されるべきだが、学問や芸術の分野では、価値の蓄積が大事で、古典も重視されなければならない。